

古物見本草

卷之首

序  
自註





中よりも風情とゆふと云ふとさうの  
うちやどかへて続々今時鄙鄙工能作  
を弄事已へぬと齋又其中年は向去  
若思と云ひ人多うといつても心が  
一ノモレで更各別立多うとそぞく  
多天鬼鬼辰水とよよけめり取初  
字へちゆうとそぞくあ一途とめ  
クたうるおの跡をあそびれば貶め  
互に傳ほのまゝ持扇れうまとく

あともあわいとすらもあらうへこりて  
さうすま此明暗とそもとあとのわ  
やうくはすこゑをむかひとゑを守  
よ龍宿の森もとゆき物一の鬼もと  
桂よ草も白もあらじソセカの匂くよ  
え文字川うそうわどくうるうくえ  
もうすと毛一曲八句すりむらう立文字  
のゆくくくく彼杜工部う詩の林光著  
雨膳脂湯と云句の温ち室とし

引東坡山谷女游佛印等、潤老皴落と補  
ひ一事じゆりいぬあり今は郊う竹被  
名とゆきくらくよ力文字とゆくじ  
未だせや桂り葉らうと白たと 似乳  
傍へよあるくはよ豆有白きも 常寂  
内をくれらひ不つ豆を白きも 犬  
飼の長の様アリ豆けうと白たと 晚山  
當分を立と至るよりの 簿

桂し草アハキを拂 す

豪

卷

三

方の心をいぢる。何れかといふと、

一うれと北きんや毛杜詩の句の温字  
よ各あくはうかうかよくゆうじいの  
ひりよひきれどかくてうしとくくらふ  
あよあくくさくのまとはくまや都と姫  
徳よあくよつてくわむ程め家近へゑとあい  
旦とわれうすりひづるふの句意を解へむ  
も奥を家近め句と解へくらむ其ふく

卷之九  
道もとづくの句かと書  
りつれしく所の樂として居らんと申同  
ひて京田舎に山鳥有あまくと富よめ  
そくといふや吾曰これをあつゝとく  
所の巨若は式を圓と角とて孤と水を  
立木へ本起ふるれ山の氣するまくとく  
を此翁不との方角とあり地主わうう  
けりひきあはる水路の字ねとむえよ  
とまうす合のことをおつづくまこと

もと立とうと今ひるおひしりへる所とある  
ぬ事とまことのとてすとあらじきの通すより  
とくゆべすとよと林ねひりをすとせ  
や作ひ一巻ばうけ取く西行の往と頭  
ナリ物見車と歌うして林ふとを  
ちとすやねよ梓よらうとあゆうてと爲  
毛猿翁人のとくとくわくとあきとくとく  
思ひをかねむり不わくへ業下れ令もすく  
く書はくとくとくとくとくとくとくとくとく

下り投と維時元禄二庚午八月中秋盡  
雅達橋頭隱士ち雲子叙



### 般仙く離譜

自註

三月月乃わづきを料そ紙を

夕陽よじる三日の月ぬきわくは  
うかすこわゆのまき月のろ  
次第に農なるとて真毛くらむ  
瓦月の料とも作はば

花乃底つもあふたと葉落付毛

毛のくもきくノ郡のまことにも  
よをま銀葉の毛れ、角くこと角  
のくと柳の拂ふはわくもや

五言七句の序文

杖よもや竹の牋をまわして  
杖よ切カツりもとて竹の牋シハ小わら  
翁と翁のなれ子にまき下シタもあす

句意

某の死のゆゑと想せま候ふ  
作をそのまゝしたのつまも引る  
まかへるの状とも

伍板と塵スミは人のとどきひ

躬ボク人ヒト竹枝チカラし  
雨レウやヤともモちもモあアつツ  
わカくカ小コトハたタひヒのノもモあア  
かカくカ月ヅらラもモみミまマくクれ  
らラとトきキつツあアぬヌ作ハくクも

とむらトムラをえヲエ林リを湯ヨ屋ヤとト所シ  
とむらトムラあアとトはハしシ作ハつツ止スはハ城シヤ  
ケケ山サン酒サケ門モン入ルへヘきキくクのノ  
ほホれレりリとト木キ板バン田タ食シのノ中ウあアとト用ヨ  
立タとトもモしシとト梨リ白シのノ所シとト  
付ハ瀕ハしシんシよヨはハ

草シの舞マツ臺ヂの衣イ装アツ備ビれ

一ヒじシよヨうウとトえエの儀ギりリまマす  
委ミ縫ミナフとトあアうウおオねネまマなナをヲ思シまマぐ  
まマをヲ家カなナくクすスやヤとトうウいイおオをヲ

五ゴ意イ五ゴの舞マツ臺ヂとトふフもモもモ

行方へ糸のと日とむらを帆

立木<sup>ヨリ</sup>かく村食<sup>ミヤ</sup>かほきしよ  
わめくろくのゆくまも<sup>アモ</sup>耶  
ちく付觸<sup>アハ</sup>て加<sup>シ</sup>

智<sup>チ</sup>め<sup>テ</sup>廬<sup>ル</sup>廢<sup>ス</sup>はれま<sup>ス</sup>す<sup>ル</sup>船

神<sup>ミ</sup>モ<sup>リ</sup>の<sup>ア</sup>シ<sup>ハ</sup>はわ<sup>ル</sup>  
ま<sup>ム</sup>あ<sup>ク</sup>と<sup>レ</sup>り日<sup>ミ</sup>ち<sup>リ</sup>糸<sup>ス</sup>  
も<sup>モ</sup>ひ<sup>シ</sup>人<sup>ヒ</sup>と<sup>ナ</sup>り<sup>シ</sup>う<sup>ト</sup>  
あ<sup>ル</sup>の<sup>ア</sup>舞<sup>ハ</sup>ね<sup>シ</sup>り<sup>セ</sup>キ<sup>ト</sup>  
付<sup>ハ</sup>ま<sup>ス</sup>ぞ<sup>ロ</sup>を

肺<sup>ハ</sup>の<sup>ア</sup>シ<sup>ハ</sup>後<sup>タ</sup>を<sup>ハ</sup>の<sup>ミ</sup>と<sup>立</sup>の<sup>ミ</sup>

素<sup>シ</sup>の<sup>ア</sup>附<sup>ハ</sup>物<sup>ハ</sup>す<sup>レ</sup>不<sup>レ</sup>説<sup>ハ</sup>

頃<sup>ハ</sup>は<sup>代</sup>てま<sup>ス</sup>し<sup>シ</sup>よ<sup>シ</sup>

き<sup>ハ</sup>と<sup>の</sup>と<sup>葉</sup>せ<sup>ハ</sup>て<sup>シ</sup>と<sup>シ</sup>  
幻<sup>ハ</sup>現<sup>ハ</sup>と<sup>見</sup>る<sup>シ</sup>と<sup>す</sup>さ<sup>シ</sup>ま<sup>ス</sup>  
頃<sup>モ</sup>事<sup>ハ</sup>附<sup>ハ</sup>物<sup>ハ</sup>し<sup>ム</sup>下<sup>の</sup>此<sup>ハ</sup>  
假<sup>ハ</sup>名<sup>ハ</sup>と<sup>シ</sup>も<sup>ハ</sup>の<sup>シ</sup>は<sup>シ</sup>と<sup>シ</sup>  
と<sup>も</sup>ま<sup>ま</sup>は<sup>シ</sup>む<sup>カ</sup>め<sup>ハ</sup>一<sup>シ</sup>六<sup>シ</sup>  
肺<sup>ハ</sup>の<sup>ア</sup>シ<sup>ハ</sup>後<sup>タ</sup>の<sup>ア</sup>原<sup>ハ</sup>を<sup>シ</sup>  
む<sup>シ</sup>の<sup>ア</sup>ま<sup>ま</sup>と<sup>シ</sup>を<sup>シ</sup>が<sup>シ</sup>付<sup>ハ</sup>う

移<sup>ハ</sup>ても<sup>ハ</sup>の<sup>シ</sup>の<sup>シ</sup>町<sup>ハ</sup>遠<sup>シ</sup>

西陳<sup>ハ</sup>も<sup>シ</sup>と<sup>シ</sup>通<sup>ハ</sup>場<sup>ト</sup>す<sup>シ</sup>君<sup>ハ</sup>  
わ<sup>シ</sup>の<sup>シ</sup>と<sup>シ</sup>を<sup>シ</sup>原<sup>ハ</sup>の<sup>シ</sup>と<sup>シ</sup>  
ひ<sup>シ</sup>ひ<sup>シ</sup>ま<sup>ス</sup>て<sup>シ</sup>も<sup>シ</sup>

妙實出した月のやまと

あ句註成りて 附食と

時ヨリあるのをこのつと號

親の目よしのまゝれあらへにせ

至後のわらわめくままで  
おき家事。ふかくしき親の目  
はもまれゆすのたひと  
附毛毛をば年とみりん毛毛を

もくとて是ての廻

武まえにいとくどくしき  
き氣一もき唯我物のらうを

育すをりのはまのるわき  
わをほれまよわすく  
るのゆくゆ應そまみすよ  
付くる

ねぎの猿巣の味流とを頼  
るのゆくとすずあぢれとを能  
と育じる。庵と下の木もくと  
付くる猿巣上よりもまく

け眼のうとくし家柄

亦りよもきて多ひくうかく附食  
子からひとはるの徒を負  
あらも自らの極よわづれ

旅行の趣旨の如きとて  
ああどうのりともとれ  
まよひを附す

新紙へとあるが、傷

自句考の註などもあらず  
わらうの氣味よからず

養ぬの事によ聞て謝られ  
ほるくは候本と見てその  
浦くらきおれ御引領せ  
然て笠綱舟（養ぬ）  
附毛新紙へとあるが、  
もあらへど

私財を者よろちぬる外  
养ふるわざを教えます等四  
夫様の筋の筋（もももく）あ  
考とはひもあほれのえと  
猿々の筋の筋（もももく）あ  
トもちあはせとくじと並ば  
は立と集

一つ死ねの様も名はと  
うるるものにて注不対  
私よ文は法樂の歌

私とて是は所なりの字眼を採  
其號の意味よおの様もまつて  
てと付さずあるのであると

自註  
いへば、人にはくもまくら  
夜然熱きかく／＼そろ  
附屬ひて食ひとちく／＼  
まほ半ぢゆ

春は氣をかう様／＼緑の内  
匂香を重ねずよ後更モ  
傍々女唇／＼ともよろと付キ  
と不夜註匂の面にかうふるモ  
在經とうて薬 徒定

陳氏も後の人と見ひてある  
のをとまか／＼て付ま案下の  
セリ／＼もよほするもとさす

はれか／＼そく又も寒よまき  
人中あきを地のりはまし  
褐じけと黒の方拂つ姫紅  
吉三句自註よまとほひとせ  
サユレ具ち歌と書ゆ／＼まく  
そちの阿わ／＼もあくはく  
糸と煮て煮立松の正庵

人拂ひますて髪の物人拂ひ  
どうのじまの正庵よひとせ

山伏乃そ刃、いそかくうそり月

あるはあたよのぬうとも野を織  
人をもへてまをもあくのとはと  
わらきて常とうとを力れぬ  
是すらも復仇者の事うる  
いを後もとのひも繋うりと  
うるを物附きまの下龜うる  
わゆもモヘモくに髪の女れら  
もくちあ辰とれひもくくも  
がりの矣にやの麻いももち  
尚々の辯駁カタニ附公時ヨリ  
并のわやかとむしの事  
おれむる

飛騨主ねよ往かくらく御殿ぬえん  
わきとてもふ山御殿宇 往々を  
りくもて筑代も根石也よも  
まともああよ、まくとあれさぬぢ  
猿附の逃げと難の大殿うちく  
ぢふをちえと信してきまよ  
もしつと付ナ

ちておみ衣よ邊りしも秋  
ねほやきの比室もくしよも  
おみりんのうもくのまくも  
おそくわづれま東のれす  
あふふたひと今もせよもと事

歌のあひゑに哀よむとさ

常連とうかく多も一生の別れ  
今への時とすらもあやゆも  
風のうわくやどりいふをう  
安かまことぢしうはり代  
きるもほもよくわんうれ  
ももたなそへさうじう  
まわ死と離しやまえとのれ  
まらかくあまよ附ひだをう  
うりうの

ほきそくきぬいもく船の節

ゆとの风波をうくやく霞  
あくつよぬよとまくとりす  
日すよあくとくとくわくりよみ  
中のうひとむひとむまくらぐ  
段テ玉露證ガクの難せよがく  
ありあくよくしてみくら  
まくともよみ

荒涼てとほれよ歎かし

船中もよめのとおのとおの  
とみうよまく花のゆきイユトラ  
さひやく附り

くきとやし様の翻翻

すうなうをよ様十附

美のまわと情テヨモトリ

武の桃青今ハ雲母のきよに住むせる  
御宿を批判せよあん浪花の轍士  
壬生れ和及ハ予う知故かれいす仙  
けくさくおゆとゆはくうつり  
ああきなまうあひたとくねきは  
今まうものやくとよいあく神とねの  
才を悟よどりよまとまう



110X  
144  
5